

総評運動と社会党と私

——富塚三夫氏に聞く（下）



本稿は、「社会党・総評史研究会」第10回研究会の記録の続きである。富塚三夫氏の略歴と報告については、前号を参照されたい。

マル生反対運動について

——それでは、質問にお答えをいただくことにしたいと思います。最初に、「マル生反対運動⁽¹⁾」が広く国民的支持を得るには何が必要だったのでしょうか」というのが一つです。二つ目は、「スト権スト⁽²⁾」のときに動労との共闘はうまくいきましたでしょうか。

富塚 お答えさせていただきますが、その前に、お配りした資料に海部俊樹（1931年～。1989年8月～1991年11月に首相）の写真が載っているでしょう。三木内閣の官房副長官の時に、テレビの討論番組で僕と盛んにやり合ったのですが、もう弁舌がさわやかで、早稲田の弁論部出身なんですよ。ただ、私は東北の訛りがあり、最近またあまりしゃべっていないです。下手ですが、ぼつぼつ訛りを出してしゃべったのですが、テレビ社の報道局では、かえって訛りの重みが出て、聴く人にはいいといって、

本稿は、2013年11月3日（日）、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階、円卓会議室において行われた社会党・総評史第10回研究会の記録である。事前に富塚氏宛に送付した質問に答えていただいた部分（前号）と質疑応答（今号）とに分けた。読者の便宜を考慮し、中見出しを付した。（木下 真志）

だいぶ褒められたことがあります（笑）。でも、やはり海部俊樹は弁舌さわやかで、僕はぼつぼつとスト権の重要性を訴えるようなことでやったわけです。

ところが、海部俊樹とはずっと僕は仲良くてしょっちゅう飲んでいました。最近、彼はこっちのほうに来ていないので会っていないのですが、「富さんのおかげで俺は総理大臣になった」（笑）。酒を飲むと何回も言うわけです。それはどういうことかということ、宇野宗佑⁽³⁾の事件があり、次の総理は河本敏夫（1911～2001年）の番なんですよ。金丸信（1914～1996年）は河本を総理にしたくない。テレビで富塚と丁々発止やり合った海部は国民受けがいい。海部がいいんじゃないか。あのとき金丸信は自民党幹事長かな。それで海部を呼んで「やってくれ」ということになった。海部は文部大臣をやっ

(1) 1969年から71年にかけて、日本国有鉄道（国鉄、現JR）当局が推進した生産性向上運動をめぐる労使紛争をいう。マル生は、国鉄当局がその指示文書に〇生と印したことに由来する。

(2) 1975年、総評傘下の国労、全通、全電通などが8日間にわたる全面的ストライキ（スト権スト）で争議権の回復を政府に迫った。だが懸案は解決せず、その後も総評と政府の間の重大な争点として残された。

(3) 1922～1998年。1989年、首相に就任。直後の参院選大敗や女性スキャンダルに見舞われ、在任60日で退陣。

たので、今度は経済産業大臣、モノの大臣かと思っ
て行ったというのです。それが総理大臣だ
というので、本人もびっくりしてしまったわけ
です（笑）。河本をはじくという金丸のねらい
もあったのでしょけどね。海部は総理大臣に
なってから、とにかく僕と仲良くして、「富さ
んのおかげで総理になったよ」と言って、それ
こそポーランドに行くときには10万ぐらい饒
別をもらったりしてました（笑）。

話したいことは、そういう権力の中枢にいる
人間でも、どんな人間でも人と人とのつながり
ということの中では、どのような権力構造にも
つくことができるということです。いろいろな
人と付き合ってみて、人と人とのつながりの中
で判断をするというか、そういうものなんだな
ということをつくづく感じるわけです。

次に、木下さんからの、マル生反対運動につ
いての質問です。「マル生」と名を付けたのは、
毎日新聞に内藤国夫（1937～1999）という
記者がいたのです。なかなか個性的な人です。
その内藤国夫がいなかったら、マル生はあまり
世の中に出なかったと思います。徹底して毎日
新聞が国鉄の不当労働行為を取り上げてくれ
た。よその社は見過ごしていたけれども、実は
職員の自殺者も十何人出たのです。明け番の休
みには駅前の喫茶店に駅長や助役に呼ばれ、国
労（国鉄労働組合）を脱退せい、国労を脱退せ
いと言われる。管理者は保証人のところに行く。
家族にも手紙を出す。それを苦にして自殺した
分会長とか青年部長とか、そういうのが十何人
いるんですよ。国鉄当局は、不当労働行為を公
然とやった。職員局の中に能力開発課というも
のをづくり、それを全部、国労分裂、動労（国
鉄動力車労働組合）分裂の主役となって仕向け
たわけです。各地方局に能力開発課をつくり、
徹底的に具体的な指示をしたのです。

当時、私は国労の企画部長で、書記長の前で

したが、函館大会で、「座して死を待つより立っ
て反撃に転ずる」と中川新一委員長に演説をさ
せ、全国に指示をしてやったわけです。ところ
が、やはり組合員は個人的に弱いですからビ
ビってしまう。その中で、北海道の苗場工場と
か静岡とかが反撃をして、不当労働行為をつか
んで摘発することにしたのです。しかし、摘発
しても抽象的なものはみな逃げられてしまう。
それがたまたま茨城県の水戸の地方本部の高木
という委員長が、能力開発課長が現場長を集め
て「不当労働行為は断じてやらないかん」と公
然と言ったものを、その会場になったホテルの
従業員に録音をとらせたんですね。それを全部
持ってきて私は労働省クラブにすぐすっ飛んで
行って発表し、国会で取り上げた。それで磯崎
総裁（磯崎 勲1912～1997年。1969～1973
年に国鉄総裁）が責任をとって辞めたわけです。
そこでマル生運動を中止することになった。

だから組合がものすごく強くなってしまい、
今度は反対に、今まで不当労働行為を命令した
現場の管理職を徹底的にいじめる。今度は激し
くやるわけです。そのときにもう少し自制させ
ておいたならば、国鉄の民営・分割反対の流れ
はまた変わっていたのではないかという反省は
あります。

——やりすぎてしまった。

富塚 当時、中核派とか革マル派とか、それ
こそ七つの左翼集団があった。国労はその巢だ
し、動労は革マルの松崎明（1936～2010年。
動労中央本部委員長、後にJR東日本労組委員長）
が音頭をとっている。とにかく、そういう左翼
の確執などもあり、結局、マル生反対運動とい
うのは、摘発が具体的になって初めて……。水
戸のテープがなければ、恐らく押し切られてい
たと思う。国労の組織なんかなくなり、惨憺た
るものになっていたのではないかと思います。
しかし、そこで実は歯止めをかけることができ

たわけです。

結局、国民に訴えるのに不当労働行為と言ったって、なかなかピンとこないんですよね。だから、国労をやめろとか、脱退せいかいいうことを強要する。そういう点を、国民に呼びかけるにはマスコミを動かすしかない。そういうことで、マル生運動というのは不当労働行為なのだといって、内藤記者が毎日毎日、具体的に新聞に書いたわけです。そうしたらよその社も全部書くようになった。読売はナベツネさん（渡邊恒雄）なんかが、国労は昼間から風呂に入っているとか（笑）、組合批判を続けましたが、大きな流れとして、結局は、マル生運動というのは不当労働行為なんだということが国民に漠然と分かっていただき、実はスト権闘争につながっていったということです。

マル生運動が失敗したのは、生産性向上運動は利益の公正な配分、雇用の拡大ということを掲げてやったけれど、雇用が増えるわけではない。もうかったものを配分するわけではない。結局、生産性本部が音頭をとってやった生産性向上の三原則（利益の公正配分・雇用の拡大・労使の協議）と言われるものが、やはり常識としてつながらないわけです。そうすると同盟（全日本労働総同盟）や国労とは違う「新国労」といった国労批判の組合をつくらせ、そちらを応援して揺さぶる。その結果、組織対組織の対決の構図に持っていかざるを得なかった。国民の支持を得る不当労働行為というのは、水戸のテープが出て内外に明らかになり、国民の中にも浸透していったという感じだったと思います。国鉄が赤字で毎年大変なときに、春闘で賃上げだ、親方日の丸だという攻撃はやはり国民の中に入りやすいですからね。そういう日の丸攻撃とマル生運動をどうするかというのは、一言で言うと結論がないまま、国民の間には理解しにくくなっていったと思います。

しかし、先ほどは言いませんでしたが、国鉄は民営・分割化をやられましたよね。あれは分割だけは絶対に認めないということで、途中で妥協すれば解決できた。これも僕がちょっと失敗したと思っています。あのときに国会に行かないで総評に残っていたら、私は分割はさせなかった。民営化だけだったと思います。中途半端な代議士になるよりも、そのほうが良かったのかとは思うんですよね。

動労の動向と国鉄の民営・分割

そういう点で、国民の支持を得るには、やはり具体的に……職員が自殺したとか、離婚をするとか、いろいろなことがたくさんあったわけです。そういうことを考えると、マスコミで内藤記者がやってくれたことが出発点になり、不当労働行為が世の中に分かった。もう一つは、先ほど言ったように生産性三原則がその時世に合わないで、結局、不当労働行為だけになった。大体終わりごろになって国民の間で「マル生はひどかったな」ということで、あまり輪が広がらないうちに終わってしまった。それでスト権のほうに流れていき、民営・分割につながったと思います。

それから、動労の松崎明。当初は私の子分みたいで、また細井宗一（1918～1996年。国労中央執行委員）の子分でもあり、僕と細井宗一という国労の共産党所属の幹部をものすごく信奉していたわけです。私は東京の委員長、松崎は動労の委員長。言うことを何でも100%聞いてくれた。それが民営・分割になって当局側に付いてしまい、今度は一緒に加担して国労つぶしをやってしまったわけです。そのときはもう僕らは組織から外れていて、何回か選挙区から電話をしても電話にも出ないですよ。松崎は革マルの親分で大変な力を持っていましたが、革マルはコロッと100%変わって当局案に

賛成しています。今、いろいろな活動家とたまに会うけど、良しと思っている人は少ないと思います。しかし、そういうことが起こり得るのですね。

九州から出た武藤久と大阪から出た山崎俊一と私は3人同期です。僕は総評に出たから、次は武藤と山崎に委員長と言ったのですが、その山崎というのがまた、工場出身のこともあり、レールのことがあまりよく分からない。そういうこともあり、総評の江田虎臣副議長宛てに一筆書いて、「民営・分割の闘い方は一任します」と残っています。だから、今度は山崎が「国鉄三羽ガラス」と言った葛西敏之とか大阪の井出正敬とか（もう一人は松田昌士）といった連中とくっついて、一緒に国労をかき回した。そういう意味では国労も惨憺たるもので、刑事事件にはならないけど、202億の賠償⁽⁴⁾で……。亀井静香が運輸大臣で中に入り、浜松町に8階建ての小さい交通会館を建ててやるからといって国労会館をつぶした。それで202億の賠償問題を和解したわけです。ただ、不採用の1,047人のことだけは残った。国民を巻き込んで激しく復帰運動をやったけれども、…。ようやく最近、解決したのだけれど、一時金をもらって終わりです。その連中によって穴の開いたことが、いまJR北海道なんかの大きな問題になっているのです。

動労は、スト権ストのときは最後まで妥協してはいけないと言って突っ張りました。しかし、最後はどうにもならない。私は涙を流して会見しました。悔しかったですが、やはりここで収拾せざるを得ない。10日間設定して8日でやめたのですが、当時、田邊誠が書記長かな、

(4) 1975年のスト権回復ストに対し、国鉄当局は国労と動労に202億円の損害賠償を請求して裁判を起こした。86年、当局は動労への訴訟を取り下げ、国労への損害賠償訴訟だけが残った。94年和解成立。

「もうこれ以上打ち抜いて10日やったら国会は解散だよ」というふうに脅かされたんですよ。国会を解散されたらもう社会党は全滅だということで、そこで終止符を打ったといういきさつです。

JRの現状

いま分割をしたおかげで、北海道、九州、四国を見てください、逆立ちしたって絶対に黒字になりませんよ。国民の足としてあれだけいろいろな過疎の地に列車を走らせているのですから、どんなことがあったって黒字にならない。いま北海道も大変な事態になっています。一方、マル生と分割・民営化を推進した東海の会長の葛西なんていうのは、リニアをつくるとか自前でやるとかいつているでしょう。そんなばかなことがあるか。マル生の不当労働行為で救済をされない1,047人というのがいて、その闘いがずっと続いたわけです。このやり方にいろいろな問題もないわけではないのですが、その1,047人のうちの大半は北海道です。我田引水になりますが、組合運動を下積みでやるような連中はやはり仕事に責任を持つ。そういう点では、組合運動も激しいが、仕事も一生懸命やる。そういう人間がみんな首を切られてしまったわけだ。その穴埋めがないから、いま北海道もどうにもならない時代になり、ダイヤ改正で列車を減らすかなどやっているわけです。

本当は分割をしないで民営化だけだったら、九州も北海道も四国もそんなに赤字を出すような苦労をしなくて良かったと思うんですね。いくら豪華寝台列車を九州がつくってみたって、あんなのは一過性ですぐ終わりです。本質的にマル生運動が中曽根康弘首相をして国鉄の分割・民営化に走らせ、それが結果として今日を招き、労使関係はすべてマル生が出发点になります。社会党をつぶす、総評をつぶすという、

保守の戦略がずっと流れてきて、今日を迎えている。そのように見ていいと思います。

だから、結局はさかのぼって考えてみると、社会党、総評つぶしからずっと一つの戦略の流れとなって現実の姿になってきているのです。先ほどいったリニアモーターカーに批判もあります。JR東海が自前で何兆というカネを使ってやるというんでしょう。そんなばかげたことをするなら、ほんの一部だけでも政府の運用資金に入れて北海道や四国、九州に回せばいい。今、そういうことを言うやつが誰もいないでしょう。民主党も社民党も言わない。それが現状です。

民社党・同盟、加藤寛さんについて

——分かりました。次の質問です。「社会党、河上（河上丈太郎、1889～1965年。1961～1965年社会党委員長）派議員と総評との関係について教えていただければ幸いです。特に1959、60年に至る民社分裂時について教えていただければ」ということです。もう一つが、「スト権ストの問題で加藤寛⁽⁵⁾ 氏の話が出ましたが、加藤氏をご存じのとおり民主社会主義研究会議の理事で、民社党のプレーンの一人でした。いわゆる裏切りの問題は民社党、同盟の総評に対する近親憎悪もあったのではないかと思います。どのようにお考えでしょうか」ということです。

富塚 率直に言って、河上派の人たちは、社会党の中でもインテリのグループみたいなんだな。そうでしょ。労働組合なんかに関わりたくないという人が多かったですね。だから佐々木

派みたいに、激しく組合を抱え込むなんていうことも。そういう意味では、河上さんの委員長時代、河上派との関係はあまり深い付き合いはないですね。やっている人はほとんどいなかったのではないかな。というのは、やはり距離感があったんですね。河上さん自身が労働組合に対する距離感を持っていたと思います。私からしても、総評時代のときに河上派のことはあまり話題になっていなかったですね。何か聖人君子のような人で、学者のリーダーみたいな感じの人だった。河上さんの息子である河上民雄氏（1925～2012年）も国際局長などをやった。僕もちょっとやったことがある。河上派の人たちは何か理論好きで、激しい対立の運動は避けたいという意味で総評に距離感を置いていたことは事実ですね。

それから加藤寛氏。僕は心底、加藤寛さんはあんな答申を書くとは思っていなかったんですよ。それこそ先ほど言った中枢が集まった中でも、加藤寛はスト権の問題を何とか手がかりをつかむように書くだろうという分析だった。永井道雄文部大臣は直接来ませんが、その中枢との打ち合わせの中ではそういう感じだった。ところが、開けてみたら、バーンとびっくりしたわけです。やはりバックには、当時の状況からしたら、スト権なんかやったら世の中が大混乱するみたいなことが書いてあるわけでしょう。だからスト権はやらない。本当は事前に、2年間猶予期間を待ってもいい、私鉄並みスト権でいいよということを言ってあればよかったのかなという気も、しないではないんですよ。しかし、加藤寛は紛れもなく自民党の田中派からの後押しもあっただろうし、三木さんと仲良くても三木に一つの区切りをつけたいと思って、思い切ってやったのではないのでしょうか。

それにはおっしゃるように、同盟、民社党はもちろん、これで成功なんかさせたくない(笑)。

(5) 1926～2013年、経済学者。国鉄を始めとする3公社の民営化に携わるとともに、10年にわたり政府税制調査会会長を務める。慶應義塾大学総合政策学部学部長、千葉商科大学学長、嘉悦大学学長。前号参照。

アンチ総評、アンチ社会党の民社党と同盟がやはり官公労、総評憎しで、もう徹底していましたからね。先ほど話があったけど、鉄鋼労連がなぜ総評にいるのかというのが話題になった。ところが、総評にいるから鉄鋼労連の存在感がある。宮田義二さん（1924～2012年。鉄鋼労連委員長、金属労協〈IMF・JC〉議長）なんかもそう言っているんですね。だから、鉄鋼労連が総評に入っていて、右寄りのことを盛んに……。しかし、どうなのでしょうかね。宮田さんなんかは同盟を必ずしも良くは思っていなかった。鉄鋼のリーダーたちは同盟を必ずしも良くは思っていない。ただ、総評が左に行くことにブレーキをかけようということでは、宮田さんはそういう役割を果たしたのではないかと思います。

社会党・総評と民社党・同盟とは水と油と言われてましたが、労働四団体が共闘するなんて言っただって、総評が音頭をとれば必ずケチをつけるのです。中立労連（中立労働組合連絡会議）が仲立ちしなければだめです。それにはいろいろ苦労しました。やはりそういう確執というか、組織ができた出発点があるものですから、そういう点で苦労しました。しかし、同盟、民社にも、加藤寛はやはり半分、労働者を裏切ったなという気持ちは持っていると思います。

ポーランド問題と議員後援会の実態

——時間がだんだん押してきましたので、少し簡潔にお答えいただければと思います。次の質問です。「地域政治活動の拠点として、地区労のほかに議員後援会があると思いますが、日本社会党の議員後援会の実態はどのようなものだったのでしょうか」が1問です。2つ目は、「ポーランド民主化闘争支援に尽力されたときに、ポーランド統一労働者党（共産党）の友党であった日本社会党から注意などは受けなかつ

たのでしょうか」という質問です。

富塚 ポーランド問題から申し上げますと、ヤルゼルスキ政権も、ワレサ氏にはあまり悪さができなかった（笑）。我々だって検問は何回も受けましたし、持っていた荷物が最後までなくて、着の身着のまま帰ってきたこともあります。共産党政権もあまり悪さができない。だから、飛行場でも何でもここに「連帯」のバッジを付けている人が通るのです。そのようにしてやりましたが、ポーランドはもう世界のそういった流れの中に入ってしまったているから、中では反旗を翻すとか、統一労働者党も静観していたように思います。これには、世界的なマスコミの報道が影響していると思います。

——社会党のほうから何か言われることはなかったのですか。

富塚 社会党も一つの流れの中を静観してみつめているようで、そういうことはほとんどなかったですね。私には社会党からの注文や意見は全くありませんでした。

それから、地域政党活動の拠点として、地区労のほかに議員後援会があります。ただ、その後援会の柱をしっかり立てている人はいいのですが、率直に言って、今はほとんどみな高齢者ですよ。若い人をつかんでいないでしょ。だから集まれば退職者の会で、盛んに社会党頑張れ、民主党頑張れとやったって……。笑）。電話をしてこれに入れろとか言うけど、実際、活動はほとんどないでしょう。若い人をつかんでいないからです。だから議員さんの後援会も、みんなやり直しを迫られていると聞いています。先ほど言ったように、やはり金をかけなければ集まりません。ボランティアが1日、2日来たってねえ。ずっと続けていけば、それこそカネ……。友達ができて仲良くなれば、夜一杯飲んで帰る。その請求を回す。ここまでの限界だとか言えないですよ。若い人の価値観も変

わっています。

だから、ある程度拠点をつくり、公設秘書も第一、第二、第三まであるのかな。しかし、地元の秘書はほとんど私設の秘書を雇うわけです。給料をめんどろみる。車を用意する。それから、活動費を全部みる。例えば私の選挙区だって、6つぐらい市があった。市単位に全部拠点をつくると、お金が大変です。いつ選挙になるのか。2年先、3年先なんていったら、とにかく盆暮れが来るともう隠れたくなります（笑）。そんなものです。表向きは「頑張ってください」とか「先生、しっかりせい」とか言ったって、やはりしっかりした活動の費用ですね。後援会でも地区労でも、カネがないのだからこの程度の範囲とか、一定のルールをつくってきちっとやるような指導者がいれば、その人は強いんですよ。

ところが、いま若い人になり、そういう人はなかなか……。我々の時代には、鉄道の非番日には必ず選挙の応援に出かけた。今はそんなことを言ったって用事があるとかどうとかで、音頭をとったって言うことを聞かないです。だから、そういう采配のできるリーダーがいて、しっかりつかんでやっていけばいいと思います。やはりある程度、お金をつくり、ルールをつくり、後援会と地区労とが接点を持って拠点の政治活動をやるようにしないといけないと思います。ところが、連合さんの、特に若い活動家の間では、そんなことまでしなくなっているという感じで、今はうまくいっていない。だから、これは恐らくだめじゃないかな。これから先、どうするのかと思っています。

だから、もっぱら演説ばかりうまくたって、その風に乗って民主党のようにガシャーンとなったものをどうするのか。野田佳彦（1957年～。2011年首相）だって、大蔵官僚の藤井裕久（1932年～）っていたでしょう、あれが

一番ワルなんだよね。あれが消費税を言った。それは必要性はあるけど、大蔵省の官僚と結託してやったわけです。大臣になればみな焚きつけるけれど、野田は命を懸けてやった。歴史に残る総理大臣になる。それで藤井に焚きつけられてやった。今度は小沢一郎を抱き込んでやればいいものを、小沢が反対して飛び出してしまった。うまくいくわけがない。藤井は相模原ですよ。私が1回落ちたときに、新進党が何かに入れとって小沢と彼にだいぶ口説かれたことがあります。

とにかく官僚は人使いがうまい。やはり政治家なんかは単純で、みな踊らされるんですよ（笑）。政治家なんて大したものだと思うけど、とんでもない。まして1年、2年なんて国会の中で何やっていいかわからんですよ。僕も予算委員会の委員に武藤山治さんのあとになったけど、予算書がこんなに来るでしょう。それを分かっているやつは大蔵官僚も含めて4～5人きりいないというんだもの。あとはみな……。だから、予算でなく関係のない予算委員会の質問ばかり…。

官僚というのは年次からずっとみながつちりと組んでいますからね。政策投資銀行に行ったうちの二番目も、大蔵省に行ってびっくりしたと言っていましたけど、やはり年次ごとに全部がつちり……。学者の世界もそういうところがあるかもしれませんが、そういう点があります。その点で田中角栄というのは、田中角栄論の本にも早野透（元朝日新聞記者）さんとかみな書いているけども、新聞記者の連中に聞いても、まず田舎から出てきて勉強せないかんと云ったって分からない。田舎の高校ぐらい出たって、それは分からない。だから必ず呼んで聞く。それも課長以上ではだめで、係長とかを呼んで一生懸命勉強をする。帰りには真っ白い封筒に3万、5万詰めて、「おまえら、焼き鳥屋で飲ん

でけや」(笑)。必ず白い封筒で、折り目のつかない札を入れた。それは新聞記者の話です。「おまえら、外国に行くときは言っていや」。顔を出すと「母ちゃんにお土産買ってこいや」と言っ、必ず白い封筒に折り目のつかない一万円札を30万、50万入れて渡す。官僚はそれで全部、田中派になってしまうんですね。そういうことを考えると、官僚操縦法もまた非常に難しい。政治家は単純で、みな乗せられてやる。

この際、ちょっと言っておきたいのですが、小泉純一郎ね。私が初めて国会に出たときに、総評から出たからやや特別な感じで見られていたけど、国会の議員会館の地下にそば屋があり、赤城宗徳(1904～1993年。農林水産大臣)と小泉と僕はそばが好きだから必ずその席を昼時に取っておいてくれるのです。小泉が郵政大臣。神奈川ですから僕も知っていましたから、「富塚さん、とにかく官僚は今朝から誰も俺に一言も口を利かない。郵政は絶対ぶつつぶしてみせる」。執念ですよ。田中派が郵政官僚を全部押さえているから、田中派の言うことは郵政官僚は聞くけど、それ以外はみな聞かない。だから小泉は、郵政をぶつつぶしてみせるといって選挙をやって勝って、4～5年でそれだけのことをやってしまうのです。そういうものなんですよ。だから、官僚操縦法なんていうのは、相当上手に采配を振るう人がいないとやれないわけです。

例えば社会党の中で書記長とか幹部をやって、党内を把握するだけで大変だよ。ときには反乱を抑えるのでも大変です。加えて官僚操縦法まではとても行きません。そういう点では法政大学を出ている菅義偉(1948年～)というのは、僕は大好きなものだと思っています。あれは秋田の高校を出て横浜の中小企業で働き、法政の二部に入った。それで国会議員になって安倍を焚きつけて、どんどんやらしている。とこ

ろが、あれは絶対にしつぽをつかまれないでしょ、官房長官で。やはり自分で苦労しているから、大体この程度とか、ここは議論させて燃焼させればいいのか、そういうことが分かる。ほかの連中はみんなすぐ失言で首を切られるけれども、菅というのは苦労して大学に通って、市議員から国会に出て官房長官をやっているから、なかなかの強者です。だから、今回の法案なども絶対のタイミングで通されてしましますよ。ああいうのを安倍が押さえている。

そういうところの政治家の実体をしっかりと受け止め、官僚の世界をどう抑えるか。マスコミの活用をどのようにするか。政党のリーダーはいろいろな観点で動いていかないといけない。恐らく、民主党も今のままで6人衆とか何とか言っただけ、俺が俺がで選挙区でやって自分は当選できるかもしれないけど、あとはもうだめです。小沢と一緒にやった連中も今は……。山岡さんなんて国対委員長をやって、国対にはカネが入りますからね、だからもらっているからいいけども、一、二の連中はいいとして、生活の党なんかに行った連中もみな、次に当選できるかどうか。正月が来るのが怖い、お盆が来るのが怖い、盆踊りが怖い(笑)。政治家の心理はみなそうです。ところが、そこに顔を出さなければ、田舎なんかは「あんたには入れない」「あの人は顔を出した」。そんなものです。

政治家は非常に単純です。特に実力を持っている人はやはり銭を持たなければだめです。だから田中は銭を集め、銭を配り、それで天下をとることに成功した。三木さんのように理念とか理想だとか言っただけ、すぐ吹っ飛んでしまう(笑)。そういうものです。海部俊樹的なものですよ。単純だね。私は総評事務局長から政治家までやってみて、つくづくとそういうことを感じています。

山岸章さんについて

——次の質問です。「スト権ストのときに山岸章さん（1929年～。連合初代会長）は、『反対だったが、高い授業料を払わせるためにやらせた』と言っています。結果的には官公労の力が落ち、山岸さんは連合の会長になるなど山岸さんの思惑どおりになったのではないかと思います。どのような感想を持っていますか」。

富塚 率直に言って公労協代表幹事は、国労書記長富塚、全通書記長保坂尚郎。これは死んでしまいましたが、それから電通書記長山岸の3人です。あと事務局長が動労の高橋富治。それで全部、各組合の幹部が共闘委員となり、「公労協共闘委員会」を構成し、満場一致ですべて決めているので、山岸も、最初から最後まで一緒にくみしてやってきたことは事実です。

ただ、戦術面で言うと、郵便が止まるとか、電信電話が所々で止まるとかいうよりも、何と云って国鉄が動くか動かないかがすべてマスコミに登場する。その点と一緒にストライキをやっているよその組合も嫉みがあるんですよ。反対に私などから言うと、電通さんは日通さんと同様に同盟に近い考えをいろいろ持っているし、闘いに消極的だったことは間違いない。だから他の組合でも不満があり、「何でそんなに国労に付き合っただけでストライキばかりいつまでもやるのか」という反論があったわけです。

だから、山岸君などはそんなに長くやりたいとは思わなかった。動労の松崎は、「下手なことで妥結したらお尻から焼き火箸を入れるぞ」みたいなことでやるでしょ（笑）。そういう仲間内をまとめていくのは大変でしたよ。だから、いま考えてみると、足のつまさきがそのまま年中凍っているような感じでした。「やるならやってみろ」「殺すなら殺してみろ」と言っているけれど、さすがに家を焼くと言われたときは、俺の家だけ焼くならいいとして、隣近所に延焼

してしまう（笑）。それはやめたようですけどね。いま女房が朝、ラジオ体操に行ったらそんな話題が出ると、「あのとき何で奥さんがやめさせることができなかったの」って言われるようだけど、冗談じゃない（笑）。

だから、私は一手に悪者にはなっていますが、国労の32万の組織が北海道から九州まで一糸乱れず、みんな家に帰らないで寝泊まりして、職場に籠城してストライキをやった。そして最後に涙をのんで……。八重洲の国労会館の8階の屋上からよく見えますから、初電を動かすときにはやはり涙が出ました。何と総括していいかっていうね。しかし、そういう経験があつて総評に出ていき、新しいいろいろなことを考えてやったということです。落ち目の総評、社会党をどのようにしていくかが一つの課題でした。それなりにはやったのですが、できれば総評の40年の歴史の魂を少しでも継いでいってもらえありがたい。今、OB会でもそういう話をしています。

そんな感じでしたから、僕から言うと、松崎の裏切り。それから、山岸は次のポストをねらう（笑）。というのは、同盟系から支持される。右系の組合は支持するわけです。だから、左系の組合はみなこうしてやった。そういう歴史的な一つの流れです。山岸君なんかは例の細川政権ができたして、かっこよく総評が……。しかし、政治的な感覚は、山岸君も僕と同じだと思いますが、もっと原点を見て……。鉄道労働者などは長時間深夜労働で、汚染労働でもある。公労協の組合も、体質の違いもあります。

——そうでしたね。

富塚 改札口では酔っぱらいに悪口を言われる。殴られる。そういう鉄道労働者の魂は、私は違うものを持っていると思うんですよ。だから、「よし、やるならやってみろッ」となる。そういうところがよその組合には違和感がある

と思います。たばこ巻きと鉄道屋と一緒にできるかなんて総裁が言ったら、それでまた、たばこ巻きも組合じゃないかと大騒ぎになったりする（笑）。全体をまとめて引っ張るのはなかなか難しい問題ですが、私は人間関係を至るところにつくることに腐心しました。

春闘じゃないときにゴルフを一緒にやろうと言って、日経連（日本経営者団体連盟）の松崎芳伸専務と隠れてやったことがあります。それで風呂に入って、「松崎さん、背中を流しましょう」。私は1日でも早く生まれた人は「さん」付けで呼びます。年上の人にはやはり尊敬をしなければいけない。背中を流してやったら、喜んでいただいて、財界の中に行っても富塚の悪口を言わないわけよね。背中を流しただけで言わない（笑）。だから、私は大臣に招待された席でも必ずに先に「先輩、お流れを」と言って、まず一杯もらうようにクセをつけています。それをやると相手がビビってしまう。お運びの女中さんがいたら「あんたたち暑いから早く一杯やりなさいよ」とやると、そこで座が開く。そういうのはやはり、貧乏で育って苦労したからなんですね。

そこにも書いてありますが、14歳で国鉄に入ったときに、駅長室と助役室から昼夜、弁当を運ぶわけです。デコボコ道です。おみそ汁のおわんにふたがない時代です。当時は戦時中きゅうじょうで宮城（皇居）のほうに足は向けられないから、このようにして歩いていくわけです。デコボコ道だからおみそ汁がこぼれるでしょう。そうしたら意地の悪い奥さんが告げ口して、僕は昇給を蹴飛ばされたこともあります。腹が立つんですね。おみそ汁のおわんにふたもないのに。そういう貧乏で育って頑張ってきた中で、人間関係を大事にしてやっていこうと思って一生懸命努力したつもりですが、いま子や孫たちにそんなことを教えてもそっぽを向かれる感じです（笑）。

社公政権問題 他

——次の質問にうつります。「社公政権問題で松前重義さん（1901～1991年。東海大学創立者）から話があったということですが、社会党側との話し合いはあったのですか」。

富塚 松前さんは霞が関33階の総長室に私を直接呼んで話をして、社会党には話をしていないんです。それでも江田さんのグループには通じていた。松前さんは私にはぜひその立役者になってくれという話でしたから、榎枝元文さんを巻き込んで社公政権構想をまとめ、党に持っていった。北山愛郎さんも左だったんだよね。あの人を納得させた。曾我裕次さんなどはなかなか「うん」と言わなかったけど、みんな「うん」と言わせて、それで行こうというところまでなったわけです。しかし松前さんは、江田派の人たちにはアプローチしていましたが、社会党にはしていませんでした。でも松前重義さんという人は、それに執念を持ってやられた人ですよ。

——では最後の質問です。労働戦線統一問題で総評のほうが大きかったわけですよ。大きな総評が小さな同盟に押し切られるような形になったのはなぜでしょうか。結局、総評は同盟にはめられて、大が小にのみ込まれてしまったのではないのでしょうか。

富塚 それは先ほども言った一つの流れですが、保守の社会党、総評攻撃、とりわけ国鉄労働者への攻撃がありました。あなたたちは知っているけど、下平正一とか、横山利秋とか、野々山一三とか、みなそれなりの力をもって社会党をかき回していたから、そういう連中をみんなつぶしていくには国労をつぶさなければいけないということだった。同盟は総評が言うと、ことごとく反対しました。アンチ総評ですから、何を言ったって一緒にやろうと言わない。共闘をしようとも何も言わない。だから春闘で主導

権を持っている間はいいのですが、そうでなくなると、民間の組合は低成長だから雇用優先です。雇用法案と運賃値上げの問題と取引したとってたたかれたこともあります。同盟はことごとく総評に抵抗してきた総評にも金属産業の全国金属という組織があります。その出身で私の下副事務局長と同盟の副書記長とが話をし、行動を積み上げたりいろいろしたのですが、結局、同盟が民間の主役になって統一を進めることになってしまいました。そして、参議院議員をやった中立労連の藁科満治と、同盟の山田精吾の2人が手をつないで、中立労連と同盟で最後はやったわけね。それで総評が押し切られたような形です。

私は自動車総連の塩路一郎と日通労組の中川豊と3人で会って、「富さん、ここはもう避けて通れないよ」。それで労働委員会会館の前の喫茶店で腹をくくったことがあります。できるだけ引き延ばしてコンセンサスを求めるようにする。それにはどうすればいいかということで、できるだけ延ばそうということを考えました。宮本委員長にも電話をしたり、統一労組懇の幹部とも会ったりして、引き延ばしを図ろうとしたのですが、結局は押し切られてしまったと言えます。時代の流れの中でそのようになってしまったということだと思いますが、そこは黒川武さん（私鉄総連、総評議長）、真柄栄吉さん（自治労、総評事務局長）の時代になって実際にそのようにレールに乗せてしまった。だから真柄君の書いた本じゃないけど、富塚、榎枝で砂利道をつくり、我々が舗装したようなことを言っています（笑）。

それは労働戦線の統一は悪くはないですよ。当然あるべき姿です。しかし、闘わない労働組合とか、労働者の権利や生活の面倒を見ない労働組合だったら、ないほうがいいぐらいでしょう。ところが今、どうですか。皆さん聞いて

いると、JRなどそうです。次の会社側の幹部になることをめざし、地方の組織の書記長などとなっているようです。会社が推薦してやるわけです。だから、たまにその連中と話をすると、会社を良くするために次はどうするかということだから次元が全く違う。次は会社側の主要なポストになることに拘束されている。どこかで追い詰められたときには、また一つの新しい流れが出てくるのかどうか。いくら価値観が変わったからといっても、ちょっとひどすぎるということですよ。

本当は、いま自治労などがもっと頑張らなければいけないのです。地方自治体を動かしてやるような運動を積極的にやらないとだめだと思うんですよ。だから、今度のJR北海道問題だって、分割・民営の問題などをもう1回検証してみようということが社会の渦として起きてきていいはずだけど、それを誰も提唱しないでしょう。まるっきり「JR北海道は働かないからだめなんだ」というようなことでしょう。マル生とか、スト権とか、民営・分割とか、そういう一連の流れの中で、今この結果を見てどのように考えるか。民営化はしても分割はすべきではなかった。北海道、九州、四国を助けてやる、国内のもうかった分はそちらにやってやるのが当たり前じゃないですか。国民の足を守っていく。そういう当たり前なことができないわけでしょう。

そういう点を考えると、いま有識者の間で誰かが言わないといけな。どうですか、先生。やはり誰かがやったほうがいいのか。僕はOB会でも言ってみるつもりだけど、OB会がいくらやったって、みな感心して聞いているけど、実際に行動になると……。本当は今、アクションを起こさないといけないですね。民営化・分割の検証です。リニアモーターカーなんかやめなきゃだめですよ、あんなことは。そ

う思いませんか。あんなことをねえ。リニアモーターカーで膨大なカネを使い、北海道ではおっかなくて列車に乗れない。そんな鉄道はだめ

じゃないでしょうか（笑）。

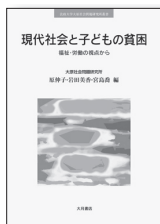
——どうもありがとうございました。（拍手）
（完）

子どもの貧困を生む構造・制度を多面的に論証
法政大学大原社会問題研究所叢書

現代社会と 子どもの貧困

福祉・労働の視点から A5判・4500円

法政大学大原社会問題研究所／
原伸子・岩田美香・宮島喬 編



先進国中で最悪ともいわれる子どもの貧困。福祉制度や支援のあり方、母親の就労環境、障害など複合的な要因を分析。アメリカ・イギリス・フランスなど諸外国の状況、歴史的事例も含めた複眼的な論考をもとに解決の道をさぐる。

視点を変えると異なる日本が見えてくる

歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史

久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵 編 A5判・2800円

姉妹編 歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史
三成美保・姫岡とし子・小浜正子 編 2800円

沖縄に根ざし、新たな文化の創造をめざす

沖縄ジェンダー学2

法・社会・身体の制度

喜納育江・矢野恵美 編著 A5判・3400円

文系大学院生必携、研究・就職に役立つ1冊

人文・社会科学系大学院生の キャリアを切り拓く

佐藤裕・三浦美樹・青木深／一橋大学学生支援センター編著

税別価格 東京都文京区本郷2-11-9
電話 03 (3813) 4651 (代表)

大月書店

メールマガジン配信中(詳細はHPで)
<http://www.otsukishoten.co.jp>